滋賀大学経済学部附属史料館 にゅうす
S・A・M
2022・5・16
No. 56

反復と、ちょっとした進展

今年もまた、新入生を彦根キャンパスに迎えました。三月初めからみかけ始めた燕が、四月に入るといっそう元気よく滑空しています。そのようすがわたしには、新入生の晴れやかでにぎやかな表情と重なってみえます。

わたしが数十年まえに入学した学部は文学部史学科で、そこでは一年生の希望者向けに、上級生がくずし字の読み方を教える自主勉強会がありました。古文書解読につながる正規の講義があったものの、確かその履修は二年次で、しかもおもに中世の文書がテキストでした。それはどちらかというと漢文読解で、くずし字に慣れる機会ではありませんでした。

自主勉強会ではまず、宗門人別帳の文字を読んでゆきました。定型の文言がならび、人名が多かったから、それを初心者用の教材としていたのでしょうか。―兵衛、―右衛門、―左衛門、太郎右衛門などの名が読めるようになると、そのつぎには、夏の史料調査に備えて、「乍恐」に始まり、「御座候」に終わる文章や、「有之候」や「被仰出候」など頻出する独特の言い回しとそのくずし字を覚えてゆきました。

わたしが学部生だった一九八〇年代は、あちこちの自治体で歴史編纂がおこなわれていて、夏休みにはそうした市町の下請けのような感じで、地方や村方の文書を調査し、その目録をつくる作業を泊まり込みでしました。ただ、村の家々をまわるときに、史料はありませんかとか、文書を探していますとかいっても、伝わらないことが多く、和紙に筆で墨の文字が書かれた古い書きつけはありませんかといって、たずね歩いたものでした。

一年生のときの史料調査では、もっぱら、宗門人別帳などの冊と呼ばれる形態の文書の目録をつくりました。それらは、表紙に記された史料名と年代と、名主などの名を目録に書けばよく、状と呼ばれる形態の一枚ものやそれらを紙縒で綴じた文書は、先輩たちに渡していました。三年生になると、水や境にかかわる訴訟の文書もいくらか読めるようになり、目録をつくることができる文書の幅がひろがってゆきました。

当時は、柏書房が出版した字典をくりかえし引いてくずし字の型を覚えました。そしてあれこれの文書をたくさん手にとってみたり写真版でみたりする反復をとおして、少しずつ、くずし字が読めるだけでなく、文書に書いてある内容がつかめていった気がします。

この反復によるちょっとした進展は、くずし字にかぎらず、語学も、そしてどの学にも、また料理や運動にもつうずる、覚えること、学ぶこと、わかること、できることの基本でしょう。くりかえさないと、身につかないどころか、いったん修得したはずの技術や技能がいともかんたんに身体からはなれてゆきます。レッスンを一日休むと自分にわかる、二日休むと仲間にわかる、三日休むとだれにもわかる―と技術が朽ち、技能が剝がれてゆくもととなる怠惰を戒める警句があります（森下洋子さん、バレエ）。

日々、倦まず弛まず、といわれると、ちょっと鬱陶しいでしょうが、しかし、反復は大切です。くりかえし、くりかえす、くりかえし。

（史料館長　阿部 安成）